



UNNAN  
SPECIAL  
CHALLENGE  
雲南スペシャルチャレンジ

# Report

雲南の大地の味  
おじわってください



令和2年度 スペシャルチャレンジ ホープ 3期生

★ かめか しゅんじ  
**鹿糠 俊二** さん

横浜出身。横浜、銀座で料理長を経験。平成30年、妻の故郷島根に移住を決断。農業体験事業を利用して農業、猪解体に携わる。雲南市内の飲食業でも活動し、新規事業にも力を注いでいる。



完成したイノシシのソーセージ

## プロジェクトを思いついたきっかけは？

**獣害駆除について詳しく知ったことがきっかけです。**

雲南市では、獣害被害対策としてイノシシを獲られているものの、1日1頭が限界、それ以外は廃棄していると聞きました。

東京の料理店で働いていたときイノシシ肉を1キロ8,000円で買っていたこともあり、イノシシが廃棄されるのはもったいないと思ったのと同時に売れば儲かるんじゃないかと思って事業化を考え、このプロジェクトを立ち上げました。

## スペチャレに参加した理由は？

**知人に紹介され、補助金があったので、設備投資できると思っていたからです。**

実際に、予算的に難しかった厨房機器「プラスチックラ（瞬間冷凍機）」が購入できました。この機械があると、安全性、高品質な商品を提供できます。

また、コンサルタント経費にも活用することができ、販路の見通しも立てることができました。販売促進のためのホームページやロゴも作成しました。

さらに、スペチャレの参加者とのつながりでキッチンカーの購入や修繕、備品整備も行うことができました。新たに商工会とのつながりができ、事業支援をいただいています。

## 今後の予定は？

食肉2種を取得したので、イノシシの生肉の販売も可能です。加工所も完成するので、イノシシのソーセージから販売を開始していきます。

また、島根県農業実習生をしている学生を5月(令和3年)から雇用する予定です。

## 将来やってみたいことは？

新型コロナウイルスによって、飲食業は大変な状況です。

東京の知り合いの料理人たちも、この先仕事があるのか不安に思っています。

料理するだけのシェフではなく、豊かな自然の中で、畑をしたり、食材を調達したり、自分のやりたいことが実現できる、自分のようなモデルを発信し、料理人たちが雲南市に来てくれるといいと思います。

**雲南市の交流人口を増やし、定住人口も増やしたいと思っています。そして、このプロジェクトで雇用を増やしていきたいと思っています。**





令和元年度 スペシャルチャレンジ ホープ 2期生

★ ふじい ひろゆき  
**藤井 寛幸** さん

松江市在住 島根リハビリテーション学院を卒業、平成 26 年 7 月、株式会社コミュニティケアへ入社。作業療法士として雲南市内で住民へのケアを行っている。



業務における痛みのリスクをチェックする様子

## 藤井さんのプロジェクト

作業療法士として、株式会社コミュニティケアへ入社し、地域に出かけて話をすると、腰痛を患っておられる方が多いことに気がつきました。

地域の方と話をしてみると、「病院へ通院し、湿布を処方されているが、完治していない。どうしたら治るのか、どうしていいのかわからない」といった声を多く聞きました。

そこで、腰痛の原因である環境を変えることで、腰痛が解消されるのではないかと思い、「暮らしのリハ室プロジェクト」を立ち上げました。

活動の中で、「腰痛の悩みは働き世代に多く、職場の環境が大きい」ことがわかりました。

個別に指導するだけでなく、会社での取り組みも必要と判断し、スペシャレを通じてつながった株式会社協栄ファスナー工業の松本社長(写真左)にプロジェクトについて相談しました。

松本社長も自社の業務において、重たい荷物を持つことが多いため、それが社員の腰痛の原因になっていることから、電動のリフターを購入するなどハード面のサポートは行ってこれました。しかし、ソフト的なことは、社内ではどうすることもできなかったため、この取り組みに興味を持っていただき、テストケースとして実施することになりました。

最初に協栄ファスナー工業の社員の業務内容とそこにおける腰痛などの痛みの原因になる動作等のチェック、ヒアリングや指導を行いました。

また、継続的にケアができるように「自分たちの問題は自分たちで解決する」をテーマにセルフケアの重要性についてのワークショップを開催しました。ワークショップでは社員からたくさんの意見が出たほか、終わった後も、互いのグループで出た意見について話し合うくらい、全員が「自分のこと」として真剣に取り組んでおられました。

参加した社員からは「藤井さんの話は、社員にとってもわかりやすく、みんなが話を熱心に聞いていました。その後も、出た意見について、こうしたら良くなるのではと、集まって話しています。業務改善に向け、自分たちで考えて取り組んでいます。藤井さんに出会わなかったら起きなかったことです。」と感想をいただきました。

今回のケースのように、作業療法士が企業と一緒に、環境を分析し指導するモデルは日本ではまだありません。作業療法士として、新しい日本のモデルになると思っています。そして、作業療法士として、新しい働き方も提案していきたいと思っています。そして今回の学びをステップに活動を前進させています。